

青森県立郷土館だより

通巻150号 平成23年(2011)8月15日 Vol.43 No.1

青森県立郷土館研究紀要

第35号 平成23年3月15日

Bulletin of the Aomori Prefectural Museum No.35

01 岩手県立博物館所蔵の Fortipecten ken-yoshiensis	島	09 ドゲブネ(胴海船)をめぐる諸問題	福眞陸城・小山隆秀 昆
02 青森市東岳における鉱山史	島口	10 民俗資料としての写真 ～佐々木直亮先生撮影写真について	成
03 青森県田子町のトビムシ類	山内 智・須摩 靖彦	11 イタコ「地獄さがし」	北川達男
04 青森県南部の蛾類(11)	山内 智	12 写真で見る青森市の都市化	安田 道
05 植物学者郡場寛博士の履歴(3) 1918-1920年の国外留学	山内 智	13 大正時代の青森の美術団体について(1)	
06 旧青森県立第二中学校収蔵植物標本目録	齋藤信	14 青森市内における暮らしの変遷 ～衣生活を中心に～	對馬恵美子
07 青森県青森市三内丸山(9)遺跡における トチノキ利用について	伊藤 由美子	15 八戸市近郊における暮らしの変遷 ～食生活を中心に～	工藤陸美
08 青森県津軽地方の地藏信仰の再検討 -弘前市内寺院の位牌型地藏像調査に基づいて-		16 移動博物館「古い道具と昔の暮らし」について	工藤陸美

『青森県立郷土館研究紀要第35号』をPDFファイルで閲覧・ダウンロードできます。

『青森県庁ホームページ』 [<http://www.pref.aomori.lg.jp/>] → 「文化」

青森県庁ホームページ 観光・文化・教育 > 『文化』 [<http://www.pref.aomori.lg.jp/bunka/culture/index.html#jomon>]

《県の文化施設関連ページ》 → 「青森県立郷土館」

青森県庁ホームページ 観光・文化・教育 > 文化 > 『青森県立郷土館からのご案内』 [<http://www.pref.aomori.lg.jp/bunka/culture/kyodokan.html>]

《バナー集》 → 「出版物案内」

青森県庁ホームページ 観光・文化・教育 > 文化 > 青森県立郷土館からのご案内 > 『郷土館の出版物』 [<http://www.pref.aomori.lg.jp/bunka/culture/shuppan.html>]

《郷土館研究紀要》 → 「青森県立郷土館研究紀要 第35号(平成23年3月15日発行)」

青森県立郷土館からのご案内 > 郷土館の出版物 > 青森県立郷土館研究紀要第35号(平成23年3月15日発行)

[<http://www.pref.aomori.lg.jp/bunka/culture/kennyu-kiyou003.html>]

⇒「目次分岐」 ⇒「PDF版各論文」

平成23年度行事予定

○特別展	地域総合展「十和田湖・八甲田山」	会期	7月15日(金) ～ 9月11日(日)
○共催展	「八代亜紀 アートの世界展」	会期	9月17日(土) ～ 10月16日(日)
○企画展	「今純三と考現学展」	会期	10月28日(金) ～ 11月27日(日)
○特別展	青森県博物館ロード「青い森の宝箱 一県内博物館名品大集合!!」	会期	12月9日(金) ～ 1月29日(日)

□郷土館クイズラリー 夏休み・冬休み期間中 対象 小中学生(「ミュージアム探検隊」 上記期間以外)

●自然観察会 10月16日

▼土曜セミナー 毎週土曜日 13:30～15:00

利用案内

○開館時間 午前9時～午後5時

○休館日 9月12日 9月16日 10月17日 10月27日 11月28日 12月8日 1月30日

年末年始 12月29日～1月3日 工事休館 2月以降年度内予定

◎常設展観覧料 【通常期間】 3月～12月 一般310円(団体250円) 大学・高校生150円(団体120円)

【特定期間】 1月～2月 一般250円(団体200円) 大学・高校生120円(団体100円)

青森県立郷土館だより Vol.43 No.1 通巻150号 2011.8.15

【編集・発行】 青森県立郷土館

〒030-0802 青森市本町二丁目8-14

【TEL】 017(777)1585(代) 【Fax】 017(777)1588

【電子メール】 E-KYODOKAN@pref.aomori.lg.jp

【ホームページ】 <http://www.pref.aomori.lg.jp/bunka/culture/kyodokan.html>



津軽の人々を魅了してきた、金多・豆蔵(キンタ・マメジヨ)の人形芝居は、明治後期に旧木造町館岡の野呂粕次郎が、上方の人形芝居をもとに創始したといわれています。

その後、二代目木村幸八氏へと受け継がれ、大正・昭和期に津軽各地の巡業で評判を呼び、昭和47年には五所川原市無形文化財に指定されます。平成期に三代目木村巖氏が継承し、中泊町無形民俗文化財に指定され、今もなお根強い人気に支えられています。

金多・豆蔵の名前は「まめめしく働けば、お金が多く入り、やがて蔵が建つ」という意味だといえます。人形劇は、高さ一、二メートルの組み立て式舞台の陰に隠れた一人の演者が、約六十センチの大きさで指三本で操作するからくり人形を、左右の手に一体ずつ装着し、中腰で立ったまま両手を上方へ掲げて操作し、同時にすべてのセリフ回しも一人で行う、という高度な技術が要求されます。それに囃子方と介添え役が一、二名つきます。

演目は主に伝説や昔話等を骨格に、現代の世相も織り交ぜながら、酒飲み金多、おっちょこちょい豆蔵の主役二人が、人情味とユーモアあふれた掛け合いを観客とともに展開していきます。

7月24日当館小ホールにおいて一時間ほど、金多・豆蔵人形一座による「鬼神のお松」および人形手踊り等の公演が行われました。「鬼神お松」とは、日本各地に伝わった仇討ち話で、青森県でも十和田湖周辺の奥入瀬川溪流沿いの石ヶ戸に、旅人を苦しめた女盗賊鬼神のお松が棲んだという岩屋跡が残されています。

本公演では、笠松峠でお松のだまし討ちに遭った弘前藩士夏目弾正父子による仇討ちに、金多・豆蔵が加勢するお話が演じられました。当日は事前予約で満員御礼となり、お子さんからお年寄りまで多くの方々においでいただき、闇のなか幻想的なライトに照らされた人形たちによる、こっけいな漫才、激しい立ち回り、アクロバティックな舞いに魅了されました。(学芸主査 小山隆秀)



戸倉嘉明コレクション寄贈記念

「野澤如洋展」

学芸課副課長 (美術) 対馬恵美子

青森県立郷土館では平成23年4月22日(金)から5月15日(日)にかけて戸倉嘉明コレクション寄贈記念「野澤如洋展」を開催しました。

この企画展で紹介した野澤如洋の作品は、平成22年11月に、戸倉武彦氏、戸倉輝彦氏、山田喜久子氏の御3名によって、青森県立郷土館に寄贈していただいたものです。当館では、この寄贈を機会に、戸倉嘉明コレクションの全貌を公開し、多くの県民の方々に青森県出身の芸術家に対して、さらに関心と理解を深めていただきたいと思います、本展を企画しました。



(会期中に来館いただいた山田喜久子様御家族)

これらの作品は、御3名の御尊父にあたる故人・戸倉嘉明氏が、水墨画の妙技を極めた野澤如洋の作風に深い感銘を受け、長年にわたって収集して来たもので、その内容は、最後の大作の屏風を含む優れた作品が多数含まれ、作品数も73点と大変充実したコレクションとなっています。今回の展示では、これらの作品を、画(絵)のテーマごとに、「くさばな」、「いきもの」、「さんすい(山水)」の三つに分けて展示し、さらに日本画の基礎知識や如洋作品の手引きとなる解説をつけるなど、如洋の作品の鑑賞を深められるようにつとめました。

また、当展の開催にあたって、御長男にあたる武彦氏から、次のようなコメントをいただきました。

「私達の父である戸倉嘉明は、明治43年、東京にて父、戸倉惣太郎(安田火災海上(株)初代社長)母、戸倉富子の5人兄弟の長男として生まれた。成城学園高等学校から京都帝国大学に進み、文学部哲学科美学を昭和11年に卒業している。



その後、嘉明は安田(如洋の作品の前で解説をする戸倉嘉明氏)火災海上保険(株)に入社。日動火災海上(株)(現東京海上日動(株))に移り、新種自動車保険課長、広島支店長などを経るも、やはり書、絵画への関心が強く、特に「如洋」を世に広めたいとの一念で途中退職し、以降、それに伴う活動を生き甲斐の様に余生を送り、平成12(2000)年8月3日死去した。

父は、大学時代には鉄斎等に傾倒していた。当時、如洋画伯と親交があった嘉明の父、惣太郎に同伴し、惣太郎の友人であり如洋作品を数多く蒐集されていた林靱彦(スエヒコ)氏(安田火災海上(株)社長)宅で行われた席画の場で、如洋の瞬間を捉えた速筆の見事さに大きく衝撃を受け、以降、父には蒐集を勧め、自らも如洋に傾倒していった。

如洋に魅せられた嘉明は、惣太郎の没後も、その作品を広く世に知らしめたいとの熱い思いで、知人、友人等の支援も得ながら、以下のようにその普及の一端にも傾注した。

・昭和50年(1975)年7～8月に京都国立近代美

術館にて行われた「異色の水墨画家展」に出品。特別委員を委嘱される。

・同年8月、TBSテレビ番組「美を求めて」異色の水墨画家 野澤如洋」放映にて如洋研究第一人者として解説。

・昭和53(1978)年11～12月の弘前市立博物館特別展「馬の如洋展」への出品・平成元(1989)年9月～同2年1月に行われた仙台市・山形市・秋田市・市制100周年記念「近代絵画 東北100年展」への出品。

・平成2(1990)年4～5月の弘前市立博物館での「野澤如洋展」に出品。

・平成5(1993)年5月の「馬の水墨画家 野澤如洋」展(横浜、馬の博物館)に出品。

・平成6(1994)年10～11月、青森県立郷土館での「野澤如洋と橋本雪蕉展」に出品。

父、嘉明は常々、自分の蒐集した作品が、いずれ如洋の生地(出身地)に、故郷の宝として、多くの人々にみてもらふことを望んでいたが、その思いは叶うことなく、亡くなってしまった。しかしこの度、縁あって青森県立郷土館に父が情熱をかけて蒐集したコレクションが収められ、父の希望が実現したことは、遺志を継いだ私たちにとっても、大変喜ばしく思う次第である。」

野澤如洋は元治2年(1865年、5年後に明治となる)、青森県弘前に生まれ、主に京都及び東京を創作の拠点として日本画を制作し、明治期の国の主催する展覧会に数多く入選した日本画家です。如洋は水墨画の発祥の地である中国に5年間渡り研究を深め、その後、西欧やアメリカなどを周遊し、画業を深めました。



(野澤如洋)



「梅林群馬図」

如洋の豪快で、潔い画は、当時の多くの文化人達を魅了しました。その主要なコレクターのおひとりが、戸倉嘉明氏でした。また、本県でも、如洋の出身地が弘前ということもあり、津軽の方々を中心に今でも根強い如洋ファンが多く、今回の展示にも、多くの方々が会場を訪れていただき、如洋の魅力を堪能していただきました。



「春の海・秋の海(右隻)」

図録頒布中

- | | |
|--|--|
| □ 『野澤如洋展』 (販価 1200円) | □ 『東奥美術展の画家たち ー青森県昭和前期の美術ー』 (販価 1000円) |
| □ 『青森県近代洋画のあゆみ展』 (販価 800円) | □ 『佐藤清治画集』 (販価 1000円) |
| □ 『野澤如洋と橋本雪蕉展』 (販価 1000円) | □ 『よみがえれ北前船～北国の海運と船展～』 (販価 1000円) |
| □ 『青森県近代版画のあゆみ展』 (販価 1000円) | □ 『花の肖像画』 (販価 1000円) |
| □ 『青森県立郷土館総合案内』 (販価 1500円) | □ 『青函連絡船なつかしの百年～海峡を渡る船と人』 (販価 1000円) |
| □ 『青森県近代日本画のあゆみ展』 (販価 1500円) | □ 『花田陽悟展ー繊細な多色木版画の世界』 (販価 800円) |
| □ 『ねぶたと七夕 東北の夏祭り展』 (販価 500円) | □ 『境界に生きた人々～遺物でたどる北東北のあゆみ』 (販価 1200円) |
| □ 『ハンドブック・森の不思議な宝物 ー成田傳蔵ときのこの世界』 (販価 500円) | □ 『青森のわざ 伝統工芸のいま』 (販価 300円) |
| □ 『下北丘陵の自然』 (販価 1200円) | □ 『十和田湖・八甲田山』 (販価 900円) |
| □ 『青森県博物館ガイド』 (販価 700円) | |
| □ 『青森県立郷土館収蔵資料図録 民俗編1』 (販価 2000円) | |
| □ 『七尾謙次郎展』 (販価 1000円) | |

正面受付、郵送(送料別)で求められます。